

『 On-line みんなで法華經を学ぼう! 』 vol.17

Aug. 2023

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”.
(みんなで“法華經觀”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華經 提婆達多品第十二』 (迹門・流通分)

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜

せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』) (法師品 二〇九頁三行)

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部經 第一卷』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



《見宝塔品の復習》

・本門の教えの胎動 (P482・3行/P374・8行)

日蓮聖人は「宝塔品に事起(ことおこ)り、湧出(ゆじゅつ)・寿量に事顕(ことあらわ)れ、神力(じんりき)・囑累(そくるい)に事竟(ことおわ)る」と言われています。すなわち法華經のなかで一番大事な「本門の教え」は、この『見宝塔品』において胎動を始めました。

・宝塔は仏性の象徴 (P377・3行/P290・8行)

この『宝塔』というのは、すべての人間にそなわっている『仏性』をさしているのです。

『此の寶塔の中に如來の全身います』(二一四頁 終五行)

・分身 (P400・5行/P308・終2行)

真理の現われは自由自在なのであります。～ 尊い教えは、さまざまな聖者により、さまざまな場所で説かれます。イエス・キリスト、孔子、ソクラテス・・・。

・なぜ、『一處に還し集めて』なのか (P400・8行/P309・1行)

法華經が真実であることを証明しようとするならば、宇宙全体に散らばっている真理の部分、

部分を一か所に集め、統合した法華経とさせたうえでなければ、その真実も証明できないわけです。

『彼の佛の分身の諸佛十方世界に在して説法したもうを、盡く一處に還し集めて、然して後に我が身乃ち出現せんのみ』 (二一五頁 終三行)

・他土へ置く

(P414・4行/P320・1行)

すなわち仏の教えを聞こうとしない人びとは、そこに仏さまが充満しておられても、それを見ることができません。

『唯此の會の衆を留めて、諸の天・人を移して他土に置く』 (二一七頁 二行)

・仏さまをお迎えする

(P421・2行/P325・終7行)

まったく澄み切った無私の心で、仏の教え(真如)を迎えなければならないのです。ですから、あやふやな状態の人は、他土へ置かれるのです。

・虚空に浮かぶことの重大さ

(P431・1行/P334・8行)

それは現実の人間でも、ちゃんとその理想の世界へ達することができるのだよ——と身をもってお示しになったわけです。

・理と智と慈

(P432・6行/P335・終2行)

仏教では右は「智」、左は「理」を現わすとしています。～ 仏教では「理」と「智」の真ん中に「慈」を置いています。

『釋迦牟尼佛右の指を以て七寶塔の戸を開きたもう』 (二二〇頁 一行)

・真如に動きをあたえる

(P436・終4行/P338・終4行)

真如は人の心のなかへ動き出した時、はじめて救いとなるのです。

・真・善・美は表現されてこそ価値を生む

(P438・終5行/P339・終2行)

「禅定に入った、動かないこの姿を、いくら拝んでも価値はない。私を真実の生命(いのち)として動き出せる釈迦牟尼如来の説法を聞くことこそ一大事なのだ」と教えられているのです。

・三身仏

(P440・2行/P341・3行)

- 「法身仏・ほっしんぶつ」 真如(法) そのもの。宇宙の大生命そのもの。
- 「報身仏・ほうしんぶつ」 真如(法) を人格化した仏。また真如がはたらき出した力。
- 「応身仏・おうしんぶつ」 法身・報身の仏がこの世に現される人間としての仏。釈尊。

・二仏同坐

(P443・4行/P343・7行)

すなわち「真如(法)」と「真如(法)を説く人」とは、同じように尊い存在である。～ ですから、真如を知った者は、必ずそれ(真如・法)を人にも知らさなければなりません。真如を知りながら、それをひとり占めにするような根性は、～ もっともいやしむべき利己主義です。

『唯願わくは如来、神通力を以て我が等輩をして俱に虚空に處せしめたまえ』

(二二一頁 一行)

理想の境地をあこがれ求める心が生じてきたわけです。～ いわゆる発菩提心であって、さとりの第一歩を踏み出したこととなります。

・二処三会

(P448・終行/P347・終3行)

『第一段階』においては、物事の本質を見通す「智慧」を養う、すなわち「この世の成り立ち、人と人との関係はどうあるのが正しいか?」が説かれている。

『第二段階』 久遠本仏の大慈大悲を悟り、それに随順して一体となることが教えられている。

『第三段階』 久遠本仏の大慈大悲に包まれているという「悟り」を、「現実化」「生活への実践」「万人への普及」こそが至上命題であると説かれている。

・二処三会を日々の生活にも

(P451・4行/P349・6行)

我々の日々の生活（一日の生活）にも、この通りに行なわなければ、意味はないのです。

『**第一段階**』・**第一の靈山会**・りょうぜんえ⇒ **智慧**を得る。（法を聞き、学んで智慧を養う）

『**第二段階**』・**虚空会**⇒ 仏の**慈悲**と一体となる。（ひととき三昧に入り、仏の慈悲と一体となる）

『**第三段階**』・**第二の靈山会**⇒ **智**と**慈**の**実践**。（高めた心をもって、現実の生活も高めていく）

『誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を説かん。今正しく是れ時なり

如來久しからずして當に涅槃に入るべし』（二二頁 三行）

『佛、此の妙法華經を以て付囑して在ることあらしめんと欲す』（二二頁 五行）

『諸の大衆に告ぐ 我が滅度の後に 誰か能く斯の經を 護持し讀誦せん 今佛前に於て 自ら誓言を説け』（二二頁 終五行）

・令法久住

(P464・5行/P360・4行)

『護る』とか、『護持する』という行ないのなかには、常に『他のために説く』という積極的な行ないもふくまれているのだと、知らなければなりません。

① 『當に大願を發して 久しく住することを得せしむべし』（二二頁 終行）

② 『此は爲れ難事なり 宜しく大願を發すべし』（二二三頁 六行～）

③ 『自ら誓言を説け 是の經は持ち難し 若し暫くも持つ者は 我即ち歡喜す 諸佛も亦然なり』（二二五頁 四行）

・六難九易の法門

(P468・2行/P363・3行)

『**説經難**・せつきょうなん』 惡世において法華經を完全に説くことの難しさ

『**書持難**・しょじなん』 法華經の眞意を正しく解説し、心から信受することの難しさ。

『**暫読難**・さんどくなん』 法華經を全身全霊でほんとうに読むことの難しさ。

『**説法難**・せっぽうなん』 たった一人の人に、教えをしんから納得させることの難しさ。

『**聴受難**・ちやうじゆなん』 教えの神髓である仏性の自覚と、他人の仏性を見ることの難しさ。

『**奉事難**・ぶじなん』 教えを単に理解するだけでなく、長く身を以て保つことの難しさ。

『若し能く持つことあるは 即ち佛身を持つなり』（二二五頁 二行）

法華經の教えによって仏性を悟った人は、その人自身が仏身となるわけです。まことに尊く、ありがたいことです。

(P483・3行/P375・3行)

・ほんとうの意味での精進とは

(P486・2行/P377・6行)

『是れ則ち精進なり 是れを戒を持ち 頭陀を行ずる者と名く』（二二五頁 六行）

『能く來世に於て 此の經を讀み持たんは 是れ眞の佛子 淳善の地に住するなり』

(二二五頁 終四行)

『佛の滅度の後に能く其の義を解せんは 是れ諸の天・人世間の眼なり』（二二五頁 終三行）

『恐懼の世に於て 能く須臾も説かんは 一切の天・人 皆供養すべし』（二二五頁 終二行）



<提婆達多品のあらすじ>

【釈尊の前世の話・国王の身を捨てて一心に大乘の教えを求めた】――

多宝塔がそびえ立つ虚空（こくう）に移された法会（ほうえ）で、釈尊は法華經が、これから久しく存続させることを願い、法を説き弘める覚悟を人々に促されました。

【二二六頁 一行】 その時、**世尊**は、菩薩たちや多くの天上界・人間界の人々、在家・出家の男女の修行者たちに向かって、ご自身の前世についてお話をされたのでした。／（『我

（われ）過去無量劫の中（なか）に於て法華經を求めしに、懈倦（けげん）あることなし） 「私は無量劫というはるか昔、『法華經』の教えを心から求めていました。そして長い期間、国王の地位にいましたが、私はそのような安泰な境遇に満足することができず、常に無上の悟りを願い、精進の歩みが退転（たいてん）し、怠けることなどありませんでした」
【二二六頁 三行】 （『六波羅蜜を満足せんと欲するをもって布施を勤行（ごんぎょう）せしに） 「私は六波羅蜜の徳行を完成するために、第一の徳行（とくぎょう）である『布施』を徹底的に行じました。そのために国王として大切な象や馬、七宝の貴金属や宝石、自分が住む城、愛する妻子、そのほか召使（めしつかい）や家来、さらには自分の命さえも惜しむ心はなくなり、それらを法のために捧げる覚悟ができたのでした」

【二二六頁 六行】 「その当時の人々の寿命は大変長いものでした。その時、私は法を求めるために王位を太子に譲位（じょうい）して任せ、国中に太鼓を打ち鳴らして次のように宣布（せんぷ）したのでした。 / （『誰（たれ）か能（よ）く我が爲に大乘を説かん者なる。我當（われまき）に身終（みおひ）るまで供給（くきゅう）し走使（そうし）すべし） 『誰か、私に世の全ての人々を救う《大乘の教え》を説く人はいませんか。もしそのような人がいるならば、私は全てを捧げ、その人のために一生下僕（げぼく）として仕えましょう』と、真理の教えを得るためには、自分のすべてを犠牲にしてもかまわない決意を表明しました」

【二二六頁 終二行】 （『時に仙人あり、來（きた）って王に白（もう）して言（もう）さく。我大乘を有（たも）てり、妙法蓮華經と名（なづ）けたてまつる。若（も）し我に違（たが）わずんば、當（まき）に爲に宣説（せんぜつ）すべし） 「その時、『阿私（あい）』という一人の仙人がやって来て、このように言うのでした。『私は世の全ての人を救う教えを知っています。それは《妙法蓮華經》というものです。王の言葉に偽りがなく、【（偈）二二七頁 八行】（『若し能（よ）く修行せば我當（まき）に汝が爲に説くべし） 私に従って一生懸命精進なさるのであれば、その教えを説かせていただきますよ』と」

【二二六頁 終行】 「王は、『阿私（あい）仙人』の言葉を聞いて大変喜び、早速、仙人に仕えました。そして仙人のために木（こ）の実や草の実を採（と）り、水汲（く）みをし、薪（まき）を集め、食事を作るなど生活全般を真心を込めて尊敬の礼を尽くしてお給仕につとめました。 / （『乃至（ないし）身を以（もつ）て牀座（じょうざ）と作（な）せしに、身心（しんじん）倦（もの）きことなかりき。時に奉事（ぶじ）すること千歳（せんざい）を経（へ）て、法の爲の故（ゆえ）に精勤（しょうごん）し給侍（きゅうじ）して、乏（とほ）しき所（ところ）ならしめき） ある時は仙人が腰を掛けるための椅子になり、地に伏して四つん這（ば）いになることもありました。それでも王は下僕として仕えることが嫌（いや）になり、怠け心や疲れが起きることなど一切ありませんでした。そうした仙人に仕える修行が千年も続きましたが、 / （『大法（だいほう）を求むるをもっての故（ゆえ）に） それもすべては法を求めるためであって、王は教えを得るための喜びに満ち、求道の心はいささかも衰えることはありませんでした。王は自分だけの幸せや、 / （『五欲の樂を貪（むさぼ）らざりき） 五感の喜びを願うことなく、普（あまね）く多くの人々の幸せのために、法を求める努力をしたのです。そして王はついに、仏の悟りを得ることができたのでした。そうした過去世の私の修行精進の様子を、今、皆さんに説いたのでした」

【提婆達多・だいばだつたと釈尊の前身】——

【二二八頁 三行】 それから世尊は、諸々の比丘たちに重大なことを打ち明けられました。

「じつは、その時の王は私の前身ですが、仙人は誰かと言いますと。ほかでもありません。『提婆達多(たいばだた)』なのです。私は前世において提婆達多の前身に仕えて修行し、／(『提婆達多が善知識に由(よ)るが故(ゆえ)に』) 提婆達多という『善知識・善い友人』を持ったおかげで、私は『六波羅蜜・四無量心』を具えることができました。そればかりではありません。仏の徳相である『三十二相と八十種好(しゅごう)』と、全身が徳で満ち溢れて、最高の色である紫を帯びた金色(こんじき)である『紫磨金色(しまこんじき)』の身となったのです。さらには、仏だけが具える一切衆生の業や本性を見抜く十種の力『十力(じゅうりき)』を得ることができ、法を説くことに全く恐れがない勇気力『四無所畏(しむしゆい)』、一切衆生を温かく受け入れて教化する徳行『四摂法(ししよくぼう)』を具えることができました。また、これも仏だけが具えている一切衆生を平等に受け止める力や十八種の徳力『十八不共(じゅうはちふぐ)法』、自由自在の全ての『神通力(じんづうりき)』を完全に得ることができました。そして『最高の仏の悟り(等正覚(とうしやうがく))』に到達し、あまねく衆生を救うことができるようになりました。／(『皆(みな) 提婆達多が善知識に因(よ)るが故(ゆえ)なり』) これもすべては提婆達多という善い友人がいたおかげなのであります」

【提婆達多への授記一成仏した国の様子 — << 悪人成仏 >>】—

【二八頁 三行】 世尊は多くの出家・在家の男女の修行者にお告げになりました。

「提婆達多はこの世を去ったあと無量劫という長い時を経たのち、必ず仏に成ることができます。名前を『天王如来・てんのうにょらい』、国を『天道・てんどう』と言います。この『天王如来』は二十中劫(ちゅうこう)という長い期間の寿命を持ち、広く衆生に妙法を説かれます。その教えによってガンジス河の砂の数ほどの無数の衆生は、『阿羅漢果・あらかんが』という全ての悩みを取り除いた境地に達するばかりか、『縁覚』の境地を求める決意を起し、そして仏の悟りを得る無上道を歩む決定(けつじょう)をします。さらに『空』の教えを理解し、再び迷いの世界に戻ることがない境地に達するであります」

【悪人成仏・あくにんじょうぶつ】

【提婆達多が成仏した国の様子。 つづき】—

【二九頁 一行】 『天王仏』が滅度したあと、仏法が正しく存続する『正法』の時代は二十中劫の長きにわたります。その時『天王仏』のお舍利は、七宝で作られた高さ六十由旬(ゆじゆん)、広さは四十由旬四方もある素晴らしい塔に祀(まつ)られます。そして諸々の天上界・人間界の人々が様々な花や香、衣服、首飾り、幟旗(のぼりはた)、宝の天蓋(てんがい)を捧げ、音楽を奏し、讃歌を歌って七宝の塔を礼拝・供養します。そして無量の衆生は、『天王仏』の在世の時と同じように、『阿羅漢果(あらかんが)』という煩惱から解脱した境地に達し、また『縁覚』の境地に至り、最高の悟りを得る決意と菩提心を起こして、修行の歩みが後戻りすることのない心境に達するであります」

【青經典『提婆達多品』の箇所 / 「仏性平等・悪人女人成仏」を信ずる者は『菩薩』に成れる】—

【二九頁 五行】 世尊はさらに言葉を続け、諸々の比丘たちに語りかけられました。

(『未來世の中に若(も)し善男子・善女人あって、妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心(じやうしん)に信敬(しんきやう)して疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生に墮(お)ちずして十方の佛前(ぶつぜん)に生ぜん。所生(しよしやう)の處(ところ)には常に此の經を聞かん』) 「未來世

において、もし信仰心の篤い男女が『妙法蓮華經』の中のこの『提婆達多品』を聞いて、素直に信じ、敬い、疑う心が生じないならば（『仏性平等』『悪人・女人成仏』を信じるならば…）、その人は地獄・餓鬼・畜生という悪道に陥（おちい）ることはありません。つまり怒り（地獄）・貪欲（餓鬼）・愚痴（畜生）に苦しむ人生を送ることはないのです。そればかりかその人は、どこにいても必ず仏と共にいて、どこに生まれようとも、仏さまの御前（おんまえ）に生まれて、常に仏の教えを聞き続けるでしょう。／（『若（も）し人（にん）・天（てん）の中に生（うま）るれば勝妙（しょうみょう）の樂を受け、若（も）し佛前にあらば蓮華より化生（けしょう）せん』）もし人間界や天上界に生まれ変わっても、精神的に高い境地に達し、そしてふたたび仏の教えを聞く機会に恵まれれば、たとえ煩惱に包まれた凡夫の身であっても、凡夫の身のままで、仏のような境地に達するであります」

【釈尊が多宝如来の侍者・智積（ちしゃく）菩薩に対して、文殊菩薩に会うように勧める】

【二二九頁 終四行】その時、先に大地から湧き出た宝塔の多宝如来にお供している智積・ちしゃくという菩薩が、多宝如来に申し上げました。

「多宝如来よ。そろそろ本土へお帰りになる時です。お戻りくださいませ」

【二二九頁 終二行】すると釈尊が智積菩薩に向かって、その言葉をお止めになりました。

「善男子よ。待ちなさい。私の弟子に文殊師利（もんじゆしり）という菩薩がいますが、この文殊菩薩に会い、／（『妙法を論説（ろんぜつ）して本土に還（かえ）るべし』）『全ての人は仏性を具えて仏に成ることができる』と説く最高の教え・『妙法』について語り合い、そのあとで本土へ戻られても遅くはないでしょう。そうしなさい」と告げられました。

【智積菩薩が海底の世界（娑竭羅龍宮・しゃからりゆうぐう）から現われた文殊菩薩と面談】——

【二三〇頁 一行】釈尊のお言葉が終わるか終わらないうちに、千枚の花びらが咲き、車輪の輪ほどある巨大な蓮の華の上に文殊菩薩が坐し、同じく美しい蓮華座に坐す多くの菩薩たちを従えて大海の底の娑竭羅龍宮（しゃからりゆうぐう）から湧き出てきました。それから虚空へと飛んでいき、靈鷲山（りょうじゅうせん）の上空に達すると、文殊菩薩は蓮華座から降りて来て釈迦牟尼仏と多宝仏の前に進み出て、お二人の如来のみ足に額をつけて礼拝しました。そして智積菩薩の所へ行き、挨拶を交わし合い、共に座りました。

【二三〇頁 五行】智積・ちしゃく菩薩が文殊菩薩に尋ねました。

「文殊菩薩よ。あなたは大海の底の龍宮で、何人の衆生を教化したのでしょうか？」

【文殊菩薩が、娑竭羅龍宮（しゃからりゆうぐう）で人々を教化した成果を披露】——

【二三〇頁 六行】文殊・もんじゆ菩薩が答えます。

「無数で数え切れません。数え尽くすことはできません。あなたの推測にも及ばないほどの数です。・・・少し待ってください。／（『自（おのづか）ら當（まさ）に證（しょう）あるべし』）今、その証拠が自然と現れてくるでしょう」

【二三〇頁 八行】するとその言葉が終わらないうちに、無数の菩薩が蓮の華に坐して大海から湧き出てきました。そして文殊菩薩と同じように虚空に浮かび上がり、靈鷲山の上

空に集まって来ました。これらの菩薩たちはすべて、文殊菩薩が教化し、育てた菩薩たちで、菩薩としての徳行を完全に具えた菩薩たちです。／『皆共(みなとも)に六波羅蜜を論説(ろんぜつ)す』そして一同は、『六波羅蜜』の大切さを強調したのでした。

【二〇三頁 終三行】『本(もと) 聲聞(しょうもん) なりし人は虚空(こくう) の中に在(あ) って聲聞の行を説く。今皆(いまみな) 大乘の空(くう) の義を修行す』その中で、もと声聞(しょうもん)であった菩薩は虚空に浮かび上がって、声聞であった時の修行を振り返り、声聞の修行の大切さを強調しました。その菩薩たち現在では、**大乘の『空』の教え**を実践する菩薩にほかなりません。このことは何を意味するのかと言いますと、菩薩という高い境地に達することができるのは、下積みの修行を重ねたからこそ達し得たということを意味し、自身の救われを目的とした『声聞の修行』は、決して次元の低い無意味な修行ではないことを示すために、『声聞の修行』の大切さを強調したのであります」

【二〇三頁 終二行】 そのありさまを見ていた**文殊菩薩**が、智積菩薩に向かって言いました。「私は海底において教化した結果は、以上のようなものです」と。

【**文殊菩薩が無数の菩薩を教化できた理由を、智積菩薩が問う**】——

すると**智積菩薩**が偈(げ)を用いて**文殊菩薩**を讃歎したのでした。

【(偈)二二一頁 一行】「大いなる智慧と大徳、そして何ものにも恐れない真の勇氣と力強い意志を持つ菩薩よ。よくそこれだけ数多くの菩薩たちを教化されました。今、この素晴らしい情景を目(ま)の当たりにして、／『實相(じっそう)の義を演暢(えんちょう)し一乗の法を開闡(かいせん)して廣(ひろ)く諸の群生(ぐんじょう)を導いて速(すみや)かに菩提を成(じょう)ぜしむ』**文殊菩薩**が諸法実相を見極めておられ、『**一乗の教え**』を明らかにして人々に説き弘めて教化されたことがよくわかりました。文殊菩薩よ。これだけの菩薩を教化できたのは、一体どのような経典を説かれたのですか」

【二二一頁 五行】 **文殊菩薩**は答えました。

「私が海中で説いてきたのは、／『唯常(ただつね)に妙法華經を宣説(せんぜつ)す』 **ただ、『妙法華經』のみです**。常にこの教えだけを説いてきました」

【二二一頁 五行】 すると**智積菩薩**がすぐさま問いかけました。

『此の經は甚深微妙(じんじんみみょう)にして諸經の中の寶(たから)、世に希有(けう)なる所なり』『**妙法蓮華經**』は甚深微妙(じんじんみみょう)な教えで、さまざまな教えの中で宝ともいうべき教えです。この世において、なかなか巡り合うことが難しい稀有(けう)の教えです。その教えを聞く者のなかで、速やかに仏の悟りを得ることができそうな人はいるのでしょうか?と問うたのでした。

【『**法華經**』を聞いて間もなく成仏する者として、八歳の龍女を紹介】——

【二二一頁 八行】 **文殊菩薩**は答えます。

「はい。います。それは**娑竭羅龍王(しゃかりゅうおう)**の娘です。獣(けもの)の娘で、まだ八歳にしかありませんが、仏の智慧を具え、優れた機根の持ち主です。そして人々の口・耳・鼻・舌・体・心の全ての行為の成り行きを、くまなく見通すことができます。それ

ばかりか、善を行い、悪をとどめる力を持ち、諸仏の教えの深い真意を理解しています。また、精神を統一する深い禅定の境地に入り／『刹那(せつな)の頃(あいだ)に於て菩提心を發(おこ)して不退轉(ふたいてん)を得たり』瞬時に真理を求める心を起こし、決して求道の心が後戻りすることなどありません。法を説くことに何ら障害はなく自由自在であり、母親が我が子を思うような大慈悲心をもって全ての衆生を抱(だ)き入れています。徳分は満ちあふれ、発する言葉は奥深くて広く、すべてを包み込む真理の言葉を発します。また／『慈悲仁讓(じひにんじょう)・志意和雅(しいわげ)にして能(よ)く菩提に至れり』謙虚で慈悲深く『慈悲仁讓(じひにんじょう)』、あらゆるものと和(なご)やかに調和し、気高く崇高な精神『志意和雅(しいわげ)』の持ち主で、無上の悟りに達する資質を具えています」

【龍女が間もなく『成仏』するということを、智積菩薩は信じられず】——

【二二頁 一行】すると智積菩薩は、如何にも信じられないという思いで問い返しました。

「釈迦如来は無量劫という大変長い期間、難行苦行をされ、計り知れない功德を積み重ねられ、そして菩薩道を片時も休むことなく歩み、行じてきました。／『三千大千世界を觀(み)るに、乃至(ないし)芥子(けし)の如(ごと)き許(はかり)も、是(こ)れ菩薩にして身命(しんみょう)を捨てたもう處(ところ)に非(あらざ)ることあることなし』三千大千世界をくまなく見まわしてみても、釈尊が衆生を救うために身命をかけなかった場所は、芥子粒(けしつぶ)ほどもありません。すべては衆生を救うためでありました。釈尊でさえこのようにご苦勞をなされたにも関わらず、その幼い龍女が、あとしばらくの時間で仏の悟りを得るなどとは、どうしても信じることはできません」

【龍女が釈尊を供養・讚歎。龍女が広宣流布と人身の救済を決意】——

【二二頁 六行】この二人の菩薩のやり取りがまだ終わっていないにもかかわらず、突然、龍女の娘が釈尊の御前(みまえ)に現れました。そして龍女(りゅうにょ)は額を世尊のみ足につけて礼拝したのち、一方に退(しりぞ)いて偈を以って世尊を讚歎したのでした。

【(偈)二二頁 九行】「世尊は、／『深く罪福(ざいふく)の相を達して 徧(あまね)く十方を照(てら)したもう』どの様な時に衆生は罪を犯し、どの様な時に福を生み出すのかということをして全て熟知されており、人間の本質はそうした罪福を超えた『仏性』であることを見通されています。この深い智慧を十方世界に照らし出し、十方世界を闇から救い出されます。仏さまの尊い本体は大変清浄で、三十二の徳相と八十種好(しゅごう)という数多い福相が具えられています。仏さまのご本体は大変莊嚴で、天上界や人間界のあらゆる人々は、自分たちをお救い下さる尊い仏さまを仰ぎたてまつり、鬼神たちもまた心の底から仏さまを恭敬(くぎょう)するのです。ですから、帰依しない者は一人としていません。／『又聞いて菩提を成(じょう)ずること 唯(ただ)佛のみ當(まさ)に證知(しょうち)したもうべし』私が文殊菩薩さまから『法華經』を伺い、それによって『仏の悟りを得る道』を完全に達成することができたことをご存知なのは、ただ仏さまのみでしょう。／『我大乘の教(きょう)を聞(ひら)いて 苦の衆生を度脱(どだつ)せん』そして私は、文殊菩薩から教えて頂いた大乘の教え『妙法蓮華經』を多くの人々に解りやすく説き広め、苦しみに喘(あえ)ぐ衆生を救わせて頂きたいと存じます」

【今度は、舍利弗が龍女が間もなく『成仏』するということを信じられず、疑う】——

【二三頁 一行】その時、舍利弗・しゃりほつが横から口をはさみ、龍女に向かって言いました。

（『汝（なんじ）久（ひき）しからずして無上道を得たりと謂（おも）える。是（こ）の事（じ）信じ難（がた）し』）「お前さんは、あと少しで無上の悟りを得るようなことを言っているけど、私にはとても信じられないね。なぜかと言えば、女性はとりわけ煩惱が多く、仏さまの教えを受け入れる度量などないと言われているからだ。だから、どうして龍の娘であるお前さんが、無上の悟りを得ることなどできようか」

舍利弗は言葉を続けます。

【二三頁 四行】「仏の悟りを得る道は、まことに遥（はる）か遠い、遠い道のりなのだ。無量劫という計り知れない時をかけて努力し、修行に励み、『六波羅蜜』の実践を完璧に行い尽くしたのちに、ようやく仏の悟りに到達できるというものだ。だから、とても女人の及ぶところではない。しかも女人の身には、インドでは古くから次の五つの障（さわ）りがあるとされているんだ。第一は『梵天王・ほんてんのう/バラモン教の最高の神の一つ』になることができない。第二は『帝釈天・たいしゃくてん/バラモン教での善神』になることができない。第三は『魔王/巨大な神通力を持つと言われている神』になることができない。第四は『轉輪聖王・てんりんじょうおう/徳によって天下を統一する王』になることができない。そして第五に『仏』になることができない。そう言われているんだ。だから女人の身であるお前さんが、速やかに仏に成れるなんて、どうしてできようか」

【龍女が『宝珠』を釈尊に捧げる — 成仏の速さを証明】——

【二三頁 七行】すると龍女は舍利弗の言葉には答えず、手にしていた宝珠（ほうじゆ/宝石）を世尊に捧げました。／（『價直（けじき）三千大千世界なり』）それは三千大千世界の価値に匹敵する尊いもので、／（『佛即（すなわ）ち之（これ）を受けたもう』）そして世尊は、その宝珠をスッと受け取られました。

【二三頁 九行】龍女は智積（ちしゃく）菩薩と舍利弗に聞きます。

「今、私が捧げた宝珠を、世尊はお受け取りくださいましたが、／（『世尊の納受（のうじゆ）是（こ）の事（じ）疾（と）しや不（いな）や』）世尊が受け取られた時間は、早かったでしょう？ いかがでしょう」

【二三頁 終三行】智積・ちしゃく菩薩と舍利弗・しゃりほつの二人は答えます。

（『甚（はなは）だ疾（と）し』）「いや、早かった。じつに早かった」

【二三頁 終三行】すかさず龍女は応えました。

「じつは私の成仏は、これよりもっと早いのです。どうぞあなた方の神通力でご覧になってください」

【龍女が男子となって、成仏する姿を現わす — 《變成男子・女人成仏》】——

【二三頁 終二行】すると法会（ほうえ）の場にいる全ての者たちが目にしたのは、／（『皆（みな）龍女の忽然（こつねん）の間に變（へん）じて男子（なんし）となって』）龍女が忽然（こつぜん）と男子に変わり、菩薩行を完成した尊い身となって、はるか南方の無垢（むく）世界で、宝の

蓮華座に坐して仏の悟りに達している姿でした。しかも龍女は仏の徳相である三十二相と八十種好(しゅごう)という福相を具え、十方世界の一切の衆生に『法華経』を説くという尊い光景が現われたのでした。【**変成男子**・へんじょうなんし / **女人成仏**・にょにんじょうぶつ】

【龍女が『法華経』を説く姿を見て、娑婆世界と無垢世界が感動に打ち震える】——

【二三四頁 二行】 その時、娑婆(しゃば)世界の菩薩や声聞、天上界の人々、龍神や鬼神、人間そして人間以外のあらゆる生きとし生けるものは、龍女が仏と成ってあまねく『法華経』を説くありさまを見て、 / (『心大いに歡喜(かんぎ)して悉(ことごと)く遙(はる)かに敬禮(きょうらい)す』) 大いなる喜びと感激を覚え、全員が恭(うやうや)しく礼拝したのでした。

【二三四頁 四行】 龍女がいる無垢(むく)世界の無数の衆生は、『法華経』を聴聞(ちょうもん)して心の底から理解し、教えを実践していく不退転の決意をしたのでした。そればかりか無数の衆生は、必ず仏に成れるという保証、すなわち『受記(じゆき)』を得ることができました。そして無垢世界全体が感動で打ち震えたのでありました。

【二三四頁 終三行】 すると娑婆世界の三千の人々は大感動を覚え、精進が退転しない境地に達し、 / (『三千の衆生、菩提心を發(おこ)して受記を得たり』) 仏の悟りを求める決意を起こしました。そして仏に成れるという『受記(じゆき)』を得ることができたのでした。

【龍女の成仏を見て、法会は深い感動で包まれ、寂(せき)として声もなく】——

【二三四頁 終二行】 その光景を仰ぎ見た智積(ちしゃく)菩薩と舍利弗(しゃりほつ)、そして法会(ほうえ)の場にいる一同は大きな感動を覚え、 / (『一切の衆会(しゆえ)黙念(もくねん)として信受(しんじゆ)す』) 声を発することができず、じっと黙りこんだまま言葉を飲み込み、寂(せき)として声もなく、その尊い情景を心の奥深くに受け止めたのでありました。



仏性自覚の教えのしめくり

(P15・5行/P10・終5行)

＜★自分自身の仏性を自覚さえすれば、それがすなわち『悟り』であり、その悟りを得たものがすなわち『仏』にほかならない＞ ということになります。したがって、どんな人間でも、たとえば世間でつまはじきされる悪人であろうとも、無教育な幼子であろうと、罪のかたまりのように(古代のインドでは)誤解されている女人であろうと、**「仏性の自覚さえすれば、確かに仏に成れるのだ」**— 仏性の自覚の教えをそこまで発展させ、その締めくりとされたのが『提婆達多品』(悪人成仏・女人成仏の教え)です。

布施とは犠牲と奉仕

(P24・1行/P17・1行)

『六波羅蜜を満足せんと欲するをもって布施を勤行せしに』 (二二六頁 三行)

まず布施ということを徹底的に行じたことに、われわれはあらためてよく注目しなければなりません。なぜならば★**「犠牲・奉仕の精神」が菩薩の菩薩たる最大の特質**で

あり、人類の幸福を押し進める本当の智慧は、そうした「愛他の精神」によって養われるものです。～ 仏の前身である国王が何よりもまず布施（犠牲・奉仕）を徹底的に行じられたことには、そのような意味があることを知らなければなりません。

《患^い惟^いのひとつき ①》

「『犠牲・奉仕の精神』が菩薩たる最大の特質」であり、「本当の智慧は『愛他の精神』によって養われる」と庭野開祖は説きます。このことは、宮澤賢治の言葉である「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」にも通じます。

— この『犠牲・奉仕の精神』が菩薩たる最大の特質であるという庭野開祖の指導を、あなたはどのように受け止めますか？ また、『会員綱領』を唱える時、最後のフレーズの「菩薩行に挺身することを期す」の「菩薩行」を、「布施（犠牲と奉仕）を挺身する（身を擧げて行く）」という意味を含めて、唱えているでしょうか？

振り返ってみましょう。

『時に仙人あり、來って王に白して言さく』 （二二六頁 終三行）

《患^い惟^いのひとつき ②》

『時に仙人あり、來って王に白して言さく』と、法を求めた（求道した）時、自分から行かなければ会えないのではなく、相手（仙人）からやって来るというこの出来事を、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

『五欲の樂を貪らざりき』 （二二七頁 六行）

眼には常に美しいものを見、～ 舌は美味しいものを味わい、肌には快い感覚を求める。～ この五欲の樂を欲するのは人間の自然な姿であって、決して悪いことではありませんけれども、★あまりにも飽くことなくそれを追求していくならば、行く手には「失望と苦惱」の落とし穴が待っていることは必至です。～ 全ての人間が自分の五欲の楽しみばかりを貪るようになれば、必ず貪欲と貪欲とが衝突し合い、摩擦・争いが起こります。一切の社会的紛争というものは、貪欲と貪欲との衝突であると断じても差し支えないでしょう。 (P34・1行/P25・1行)

《患^い惟^いのひとつき ③》

「諸苦の所因は 貪欲これ本なり」と譬喩品で説かれているように、「一切の(社会的)紛争・争いの要因は貪欲と貪欲の衝突である」と、庭野開祖は説かれています。

— ではこれまでの自分で、「欲望」「貪欲」が原因で、周囲とぶつかったことはないか？ 振り返ってみましょう。

ししょうぼう 四摂法

(P41・2行/P31・1行)

仏・菩薩が衆生を**摂受**(しょうじゅ・寛容と慈悲で教化する)ための四種の徳行。

- ①**布施** ②**愛語** ③**利行**(りぎょう・衆生に利益を与える) ④**同事**(衆生に善をなさしめるために、一緒に行動すること)

時には『折伏・しゃくぶく』も大事ですが、★衆生済度の本道はあくまでも『**摂受・しょうじゅ**』です。その証拠には、この品のこのくだりに仏・菩薩の特質がほとんど挙げられています。『折伏』ということは見当たりません。このことに、よく注意すべきです。～ われわれ仏道修行者が理想としてめざす境地は『**仏**』であり、★**人を教化する際の根本的な心がまえは《慈悲と寛容》に基づく『摂受』**でなければならないのです。

《**息**惟のひととき ④》

「人を教化する際の根本的な心がまえは、《慈悲と寛容》に基づく『**摂受・しょうじゅ**』でなければならない」と、庭野開祖は説きます。

— では、相手を教化しよう(または、何かを教えよう、伝えよう)とする時の私の姿勢は、『折伏・しゃくぶく』(相手を否定し、受け入れず、責める)か、それとも、『**摂受**』(寛容と慈悲で教化する)か、どちらのタイプでしょうか?(どちらを得意技とするか?) 振り返ってみましょう。

しん ぜんちしき 真の善知識

(P43・終3行/P32・終3行)

『**提婆達多**が**善知識**に由るが故に』

(二二八頁 四行)

★《**善知識**》とは・・・ 善い友だち。

『**最高の善友**』とは、「**人生をどう生きねばならないかという大問題に眼を開かせてくれる友**」であるといわなければなりません。～

①憎々(にくにく)しい反抗者や競争相手を、感情のおもむくままに憎悪(そうお)するか?

②あるいは憎悪を乗り越えて自分を高める「よすが」とするか?

⇒ この違いに『**凡・ほん**』と『**聖・しょう**』の分かれ目があるのです。

《**息**惟のひととき ⑤》

憎々(にくにく)しい反抗者や競争相手を、①感情の赴くままに憎悪するか。②自分を高める「よすが」とするか。— 私は、①、②どちらのタイプで向き合っていますか? 振り返ってみましょう。

だいばだつた いっしょう 提婆達多の一生

(P45・3行/P33・終3行)

残念ながら、彼は人間として最大の弱者でありました。なぜならば、①**我執を捨てる**

勇気を持ち合わせていなかったからです。おのれの②罪を悔いて非をあらためる勇気を欠いていたからです。～ ③反省よりも、我執のほうが強いために、ついに心の転回の踏み切りがつかないまま、ズルズルと転落の一路をたどったわけです。

《息^い性のひととき ⑥》

「提婆達多の一生」を読んで感じたことを、かみ締めてみましょう。

じゆんえん ぎやくえん 順縁・逆縁

(P65・終3行/P47・終6行)

もし逆縁にぶつかったら提婆達多に対する釈尊のお考えを思い起こし、大乗的な悟りと勇猛心をもって対処し、自分の『成長のための栄養』としなければなりません。

⇒ これが、ほんとうの勇者であり、信仰者というものであります。

《息^い性のひととき ⑦》

『逆縁』を《自分の成長のための栄養》としなければならない」と庭野開祖は説きます。
— このことはなかなか難しいことですが、それを可能にするためには、どのようにすれば良いのでしょうか？ 考えてみましょう。

あくにん じょうぶつ あくにんじょうぶつ なぜ悪人も成仏するのか — 「悪人成仏」 (P74・2行/P54・6行)

〈仏性の平等〉ということ、人々が驚くような劇的な形をもって、人々の胸に強く印象づけるために、提婆達多の例を持ち出されたのです。～

「待てよ。提婆達多さえ仏になれるのだったら、大した悪いことをしていないこの私は、なおさら成れるはずじゃないか」～ 「①行動によって煩惱に善い方向を与えさえすれば、それが善い力に変わって、人の為にもなるし、自分の為にもなる。仏の慈悲を素直に受け取れるようになる」～ 「提婆達多は、彼の煩惱をそのまま行動に移した。それが〈悪〉というものだ。だから、彼がいったん②仏さまの教えに目覚めて、煩惱にいい方向さえ与えれば、たちまち〈善〉となすことができるようになる。悪人と善人の違いは、ただそれだけの違いなんだ」～ 「彼（提婆達多）も確かに仏に成れることが分かった。そして、この私も仏になれるんだということも、すっかり分かった！」

あくどう お ぶつぜん しょう 悪道に堕ちず 仏前に生ず

(P82・1行/P60・2行)

『妙法華経の提婆達多品を聞いて～ 蓮華より化生せん』 (二二九頁 六行)

第一は、この品の教えを素直に受け取る人は、これからさき一生、精神生活の幸せを得ることができる。～ すべての『人間の本質は仏性である』。～ 煩惱をできるだけ取り除く努力をし、その煩惱にいい方向を与えて〈善〉の力に変えてしまえば、だれでも『仏に成れる』のだ。～ この真実がわかり、それを素直に信じてきた人は～ 自らを悪道に陥れることがない（四悪趣におちいることがない）。

第二は、この品には、輪廻の思想に基づくもので、何度、生まれ変わっても必ずいい所に生まれ、仏さまの教えを聞くことができる。～ 「善い行いを続ければ、必ず良い結果が生じてくる」。反対に「悪い行ないを続けていれば、必ず悪い結果が生じてくる」という因果の法則を踏まえて輪廻をお説き下さった。～ 人間向上のための修行は、この世だけで終わるものではない≪歴劫修行・りゃっこうしゅぎょう≫の教え。～ 『浄心(じょうしん)に信敬(しんきょう)して、疑惑を生ぜざらん』の生き方とは、教えを素直にお受けして、精進を倦(う)まず弛(たゆ)まず続けていくことに他なりません。

《患惟のひととき ⑧》

①すべての『人間の本質は仏性である』。誰でも『仏に成れる』のだと素直に信じると、「自らを悪道(地獄・餓鬼・畜生・修羅)に陥ることはない。②「善い行いを続ければ、必ず良い結果が生じてくる」。反対に「悪い行ないを続けていれば、必ず悪い結果が生じてくる」という輪廻の思想がわかれば、倦(う)まず弛(たゆ)まず精進を続けていくことができる。と庭野開祖は説きます。— この教えをかみ締めてみましょう。

小乗しょうじょうの空くうと大乘だいじょうの空くう

(P101・3行/P74・終3行)

『小乗の空』は、いわば現象からの脱出です。「すべての現象は因と縁から生じる仮の現われ」という教え。(一方)『大乘の空』は、「すべては平等に本仏に生かされている」。すなわち「人間の本質は平等な仏性の現われ」であるという教え。つまり「人間の本質は平等な仏性である」。★自他の仏性を自覚し、それを開発することによってこそ、自他ともに救われることができる。それが『本質的な救い』にほかならない。

《患惟のひととき ⑨》

会員綱領でいう『本質的な救われを認識し』の『本質的な救われ』とは、「自他の仏性を自覚し、それを開発することによってこそ、自他ともに救われること」だと庭野開祖は説きます。— このことをかみ締めてみましょう。

仁讓にんじょうは東洋人とうようじんの特質とくしつ

(P112・終3行/P84・1行)

『慈悲仁讓・志意和雅にして能く菩提に至れり』 (二三一頁 終行)

『仁讓・にんじょう』— 『仁』とは、わけへだてない、広い愛情。『讓』とは、へりくだる。自分がどんなに偉くても、威張ったり、高ぶったりしない気持ち。

志意和雅しいうわげ

(P113・終6行/P84・8行)

『和雅・わげ』— 『和』とは、平和、調和の和。あらゆる人間関係の理想の姿です。『雅・げ』とは、優雅、典雅の雅。正しくて、しかも上品で、味わいのあること。いわゆる練(ね)れた人間の心の在り方。とくに女性にとっては、この『和雅・わげ』という特性はもと

もと本質的なものであります。自然なものであります。その本質的なもの(『和雅』)を失うことは、なんといたっても不合理であり、～『不幸のもと』になるのだということ、深く考え直す必要があると思います。

《息性のひととき ⑩》

「『志意和雅・いわげ』を失うことは、『不幸のもと』になるのだということ、深く考え直す必要がある」と庭野開祖は説きます。— このことをかみ締めてみましょう。

開拓者たる釈尊の大恩

(P119・1行/P88・9行)

お釈迦さまは、はかりしれないほどのご苦勞をかさねて得られた悟りを、<教え>としてそっくり我々に残してくださったのです。そのおかげで、我々はお釈迦さまよりはるか楽に、そして早く、悟りの境地に達することが可能になったわけです。

『深く罪福の相を達して 徧く十方を照したもう』 (二三二頁 九行)

衆生がどの様な時に罪を犯し、どの様な時に福を生み出すのかということ、仏さまは全て承知されており、人間の本質はそうした罪福を超えた『仏性』であることを見通されています。その深い智慧の光を、あまねく十方世界すべてに照らしています。

「罪福の相に深く達して」行けば、人間の本質は「罪福」を超えた『平等な仏性』であるという真実に到達せざるを得ないのです。

『又聞いて菩提を成ずること唯佛のみ當に證知したもうべし』 (二三二頁 終二行)

小乗の教えのうち、「修行」が悟りの第一の要因だったのですが、大乘の教えになりますと、「信」が第一の要因になります。なぜならば、久遠実成の本仏(法身)は、信じなければどうにもならないからです。修行も、その信のうえに立った修行でなければなりません。(P126・3行/P93・終2行)

信の力の偉大さ！

(P132・終5行/P99・4行)

三千大千世界と同様の値打ちのある『宝珠』とは一体何でしょうか？ それは「信」に他なりません。仏さまの教えに対する絶対の信仰です。そういう★「信」を持つことができれば、その瞬間から我々は真如(本仏)と溶け合い、一体となることが出来ます。(「信」があれば、仏さまのみ心と直通で感応し合うことができるのです。／「信」と「仏力」との感応は瞬時に行なわれるものです)～ 我々の仏性の周りに厚く作っている「迷い・煩惱」を除く努力も大切ですが、それは非常に難しいことです。～ 「われわれ人間の本质は仏性である」という真実を心から信じるのが、ずっと早道です。

《^{しゆい}息^{づい}性のひととき ⑪》

自分の仏性を開くには「仏性を覆っている迷い・煩惱を除く」ことも大切だが、それよりも「人間の本质は仏性である」という真実を、心から信じることの方がずっと早道だ。と庭野開祖は説きます。

—— では、私の修行は①「迷い・煩惱を除く」修行。 ②「相手の仏性を信じ、拝み、自分の仏性を自覚する」修行のなかで、①②いずれを主に（修行精進の第一と）しているのか？ 振りかえてみましょう。

^{しん}真 ^{だんじょびようどう}の男女平等 — 「^{にょにんじょうぶつ}女人成仏」

(P152・5行/P113・終3行)

「男女にかかわらず人間の本质は平等に仏なのだ」という大宣言にほかなりません。これほど徹底した男女平等はないではありませんか。

^{へんじょうなんし}変成男子

(P152・7行/P114・1行)

当時のインドの社会では、男尊女卑の思想が徹底していました。ですから、女性も仏になれるという思想を当時の大衆に直にぶつけるには、「女性が男性になって成仏する」という形が一番理解しやすい方法だったわけです。～ — 女性の身自身がその劣等感を打ち捨てて、男性と平等である本质を自覚せよ — という教えにほかなりません。～ 男性は素直に女性の素晴らしさを認め、もっと広々とした気持ちで、新しい人生を歩み出したいと願われてなりません。

^{さべつそう}差別相 ^{じかく}の ^{たいせつ}自覚も大切

(P156・1行/P116・終4行)

男性と女性が別々にできていることもまた、天地のありのままのすがたであることを、素直に悟らなければなりません。そして、双方がその先天的な特質を生かし合いながら、仲良く手を握ってゆくところに、ほんとうの幸せが生まれることを、大きな目でよくよく見極めて欲しいのであります。

《^{しゆい}息^{づい}性のふいかえり まとめ》

今日の『提婆達多品第十二』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) かみ締めてみましょう。

合 掌